

問題児ディヴィド・ソコロフ君

アルフレッド・ガルソン

私にかつてある一人の生徒がいた。その名をいま、ディヴィド・ソコロフと呼んでおこう。彼は四才のとき、私のところでヴァイオリンを始めた。実はその前にこの子のことでひどく心を痛めていた両親が私のところへやってきて、私は相談をうけたのであった。彼は問題児で、幼稚園を退園させられたのだという。その後、間もなく児童専門の精神科医のところへ診察にやられたほどの子であった。私はこの両親の話をきいて、心に案ずるところがあった。それまでに、幼稚園を退園させられた子どもなどみたこともなかったからである。

私のところへきた理由は、精神科医のすすめで、ヴァイオリンでも習わせたらということになってやってきたとのことだった。私がこの子に教えることに成功したら、必ずや何か良い結果が出てくるにちがいない、と考えてのことだったらしい。

正直いって、私は少々心配だった。しかし、その時私は、スズキ博士が私に教えてくれたことを、生き生きと思い出したのである。まるで、その場で博士のことばを耳にきいているかのように、まざまざと思いおこしたのである。

「子どもの進歩がどんなに遅くても、指導がどんなに難しくても、放り出してはいけません。もし、失敗しても、子どもを責めてはいけません。失敗の原因はあなたにあるのです。あなたのやり方を変えなさい。何か新しいことを考え出して、やっごらんなさい。そして、うまくいくまで続けてみることです」

私はこの難問題を受け入れることにして、両親に次の土曜日の朝、ディヴィドを私のところへよこすようにお伝えした。

土曜日の朝、10時少しまえにドアのベルが鳴った。ソコロフさんだった。ディヴィドは車の中に居るというが、どうしても入って来たがらないのだという。私はディヴィドを中に入れておもちゃ室へ連れて行って下さい、父親に言った。部屋の窓はすべて開けたままにしておいて、ようすを見に窓のところへ行ってみた。その時、父親と一緒に他の生徒たちも彼のところによってきて、ともかく彼がそこに居るのである。やがて、前の席から後の席へ、うさぎのように跳びはねるディヴィドをつかまえようとして、ソコロフさんが後方のドアを開けるのがみえる。ソコロフさんが彼の両腕にかんぬきをさすようにして押さえつけ、奥さんが彼の足をもち上げる。そして、あばれもがいて叫びわめく彼をつれてきた。ディヴィドをおもちゃ室に落ち着かせると、彼はドアをばたんと閉めた。私はみんなに、彼のことをほっておくようにと言いつけた。私のところを通りすぎて行ったときのディヴィドをみて、私は茶色の髪をした眼のきらきら輝く、なかなか男前の坊やだなと思った。

みんなが落ち着いて、いつものようにレッスンが進められた。三十分ほどして、私はおもちゃ室へ行くドアを開けた。ドアが開いた瞬間、ソコロフ夫人の声が部屋中に響いた。

「ディヴィド、ねえ、ほらきて!おりの子たちのすることを、みてごらん」

ディヴィドはまた、荒々しくドアをぱたんと閉めてしまった。レッスンの終わりに、私は両親に話した。

「ソコロフさん、そして奥さん、私はあなたがたに二つのことをお願いしたいのです。ディヴィドがここにいる間は、彼を私の思うとおりに、私の監督下におかせて下さい。もし、私にご両親の助けがいるときは、お願いをします。あなたがたがおっしゃりたいことは、私には良くわかります。でも、私がしようとしていることに、口を出さないように、手をかさないように。また、邪魔だてもしないようにして下さい。

第二に、根気強く我慢して下さい。前にもこのことは申しましたが、これからも何回も申し上げると思います。スズキ・メソッドでは“くり返し”が、非常に大切なことなのでから……」

私は、おもちゃ室のドアをあけて言った。

「グッバイ、ディヴィド、きみのレッスンはもう終わったよ。じゃ、また、こんどの土曜日にね」

彼は稲妻のように部屋から飛び出して行って、車に乗り込んだ。つぎの週の土曜日と同じことがおこった。ただ、ソコロフ夫人がずっと黙っていたという点だけはちがったが……。レッスンのあとで、私は彼女のみごとな努力をたたえてやった。そしてまた、スズキ・メソッドの大切な要素として、ほめてやるということがあったのを思い出した。

第三回も、第四回も、五回目の土曜日にも同じことが例のようにして、起こった。ディヴィドはレッスンに運ばれてきて、終わると脱兎のごとくに飛び去って行った。レッスンの途中に、私はおもちゃ室へのドアをあけてみた。彼はきまってぱたんと閉めてしまうのだった。“おもちゃ室”と生徒たちは呼んでいたが、実は私の娘の寝室なのである。私の教えていた部屋は“レッスンルーム”と呼んではいたが、実は、私たちの居間であった。全く偶然に、私はこのことが実に好都合であることに気づいた。

最初のドラマチックな変化が、第六週目の土曜日におこったのである。レッスンは半分終わった頃、私はおもちゃ室をあけてみた。ディヴィドはドアを閉めなかった。私は勇気を得た。いよいよ、一歩前進だなと思ったからである。両親の感じたことも同じだった。これが良かった。彼らは、いまにも自信を失ってしまいそうになっていたからである。第七週の土曜も同様だった。第八週には感動的な変化がおこった。車が家の前につけられた。一人の生徒が、いつも窓のそばで、ディヴィドの着くのを待っていた。車が着くと、彼が大声を上げる。

「ディヴィドが着いたぞ」

それが、大混乱の始まりを告げる合図だったのである。生徒も親たちも窓のところへかけ寄って、

朝のひと荒れする光景を眺めるのが常だった。

私はドアをあけて出て行った。ところが、その朝はソコロフさんが車のドアをあけた瞬間に、ディヴィドは自分から進んで車から飛び出ると、父親をおいて、どんどん玄関を上がりドアを通過して、まっすぐに、おもちゃ室へ向かったのである。こんどはドアをばたんと閉めなかった。しずかに閉めた。この変化のため、私もいつものおきまりの日課を変えなくてはと心に決めた。レッスンははじまってすぐのことである。私は行って、おもちゃ室のドアを開けてみた。私は息をこらした。しかし、ディヴィドはドアを閉めなかった。そのあと、レッスン中ずっとドアは開いたままだった。これは、さらに一步の前進であった。レッスンは終わっても、彼は帰るのをしぶった。こんどは両親がひっぱって、彼を車にのせなければならなかった。いよいよ、全過程が完全に逆転したのである。第十二週まではこの状態がくり返されたが、十三週目の土曜日、またもう一つの変化の起こったことに、私は気づいた。レッスンの間に、ディヴィドが他の生徒の方を数回みたのである。しかし私と目が合うと途端におもちゃで遊ぶのが忙しくて、というふりをして、目をそらすのだった。

十六週目の土曜日、はじめて彼はレッスンルームに入ってきた。だが、何もしなかった。レッスンは終わると自分から進んで、車のところへ歩いて行った。五ヶ月目に入ると、彼は私に挨拶をし、二こと、三こと、私とことばを交わすようになった。この時を逃さず「ヴァイオリンが欲しければ、買ってやるよ」と言ってみた。彼には内緒で、実は私はヴァイオリンを一つ買ってあったのである。私は何事も彼に強制したくなかったので、好機の到来を待っていたのである。

二十一週目の土曜日、ついにチャンスが訪れた。その場に居たものは、誰も決してその日を忘れないだろう。生徒は全員、それぞれの曲をひくため、自分の順番を待っていた。ディヴィドは私のとなりに立っていた。私は彼の方をぱっと向いて言った。

「ディヴィド、こっちへおいで。きみの番だよ」

彼は出てきて言った。

「オッケー。でも、ぼくヴァイオリンないもん」

生徒も親たちも、すっかり驚いてしまった。

「ディヴィド、運が良かったネ。ちょうど、きみに合う大きさのヴァイオリンの余分なのが、ここにあるんだよ」と私は言った。

私はヴァイオリンを渡した。彼の満面が輝いた。私はヴァイオリンを調弦してやった。私が調弦を終えるか終えないかのうちに、彼はヴァイオリンと弓を私の手からとってしまった。この意欲に、私は感じ入ってしまった。この間、誰一人、身動きもしなかった。彼は右腕にヴァイオリンをかかえこみ、まるでベテランのように、弓を右の人差指からたらしているのである。

私は彼に言った。

「最初のお勉強は、ヴァイオリンをひくときの立ち方、正しい姿勢です」

ディヴィドは自分の足を見下した。足を良い位置におくと、ヴァイオリンをもち上げ、あごの下にはさむと、最後に、弓をもつ右手の調整に入った。私はことばが出なかった。私はまるで夢心地でそれをみているだけだった。それから、ディヴィドは弓を上げて、A弦の上においた。何の手助けもなしに、彼は一番はじめのキラキラ星を弾きはじめたのである。私は全身に何ものかが走るのを感じて、神経が総立ちになるほどの驚きだった。これを奇跡と呼ばずして何と言おう。私たちはみな、催眠術にかけられたように、その場に坐ってしまった。その曲が終ると、一人の小さな生徒が沈黙を破って言った。

「わあ、ディヴィドがヴァイオリンをひける！」

生徒たちが、みんなににこにこしながらまわりにすわった。親たちも皆すわったままで、微動だにせず、頬に涙の流れおちるにまかせていた。

ディヴィドの父には押さえきれず彼のところに近よると、ひざをついてディヴィドを堅く抱きしめ、涙をこぼして泣いていた。母親は私のところへかけよってきて言った。

「先生の下さったことに、何と言ってお礼を申してよいかわかりません。忍耐強く、親切なご指導をしてくださって……」

私はまだ、夢心地だった。私は思わず答えて言った。

「私なんかにお礼を言ってもらったら、すじちがいです。スズキ先生にお礼を言って下さい。私は何もしたんじゃないんです。何もかも、やってくださったのはスズキ先生です。もし、あなたがお礼を言わなきゃならない人がいるとするなら、それはスズキ先生です。スズキ先生だけです」

スズキ先生がモンリオールを訪れてくださったとき、私がこの話を伝えたところ、話が終るとスズキ博士は私に言った。

「いつか、この話を書いて下さい。それはとても大切なことです。きわめて典型的なスズキ・メソードの事実ですからね。子どもたちがいかに大きな吸収力や学びとっていく力をもっているかを証明しています。他を見てまなびとっていくことの大切さ、忍耐や、じっと待つことの重要性をも証明しております。

この話を書いたら、是非、私に送って下さい」

これは、モンリオールで何年か前にした約束であった。

どの子も育つ、育て方ひとつ。ガルソン先生は何と見事にこのスズキ先生のお言葉を実践されたことでしょうか